スペイン語における複合過去

原　　誠

0. 本稿は、1982年5月22日（土）に東京外国語大学で開催された日本ロマンス語学会第18回大会の「統一テーマ：ロマンス諸語における複合過去」によるシンポジウムで、筆者が口頭発表した内容をのちに文章化したものである。

実を言うと、筆者のスペイン語文法用語リストの中には「複合過去」という用語は入っていない。筆者はこれのことを「完了形」と呼んでおり、その中がさらに現在完了形、未来完了形、過去完了形といったふうに細分化されている。ここではとくにその中の現在完了形が、統一テーマの題名の中の「複合過去」の意味するものであると解釈して、スペイン語の直説法および接続法の現在完了形に焦点をあてて、その特徴を論じることにする。

以上の但し書からわかるとおり、日本におけるスペイン語文法の研究がまだ遅れているせいであろうか、日本イスパニヤ学会が存在しているにもかかわらず、スペイン語の文法用語、とくに動詞の時制を言い表わす用語が統一されていない。筆者はあまり文法用語統一の必要性を感じないが、それでもスペイン語の初歩学習者には多大の迷惑をかけていることまで否定する気は毛頭ない。それどころか彼らには大変申訳なく思っているくらいである。しかし現実には、これらの文法用語を統一するとなると、日本のスペイン語の教師は一人ひとりが一国一城の主であるから、そう簡単に統一されるとは思えない。本稿でもこの悲観的な見方に甘えて、原　誠：スペイン語入門、東京、岩波書店、1979年において筆者が用いた独自の文法用語をそっくりそのまま使わせていただくことにする。

1. 共時的観点から見た完了形およびその他の過去時制の問題点

表題の中に「その他の過去時制」という句を入れたが、その理由は、とくに直説法現在完了形と、その他の過去時制、すなわち直説法完了過去形および直説法不完了過去形とのあいだの用法上の密接な関係を本稿でも論じないわけにはいかないからである。

1.1. 直　説　法

1.1.1. 現在完了形

日本で出版されている初歩スペイン語の教科書・参考書ではこの「現在完了形」という用語はほとんどまったく使われていないようである。たいていは「完了過去形」とか「複合過去形」とか呼んでいるのではあるまいか。筆者があえてひねくれて「現在完了形」という用語を用いたのは、決して英文法のまねをしたいからではなく、「過去完了形」、「未来完了形」との関連を考えたからである。

その活用形をhablar（話す）に例をとって表示すると、以下のようになる。

hablar

he hablado	hemos hablado
has hablado	habéis hablado
ha hablado	han hablado

なおⅡ人称複数形のhabéis hablado は中南米のスペイン語では用いられず、（ustedes）han hablado というふうに、Ⅲ人称複数形と同形になってしまう。

つぎにその用法を用例を挙げて説明しよう。

1.1.1.1. 完　　了

この「完了」の用法はさらに三つの用法に細分化される。

a) 現在より少し前に完了したばかりの動作を表わす。

例：¿Qué ha sido de Marta?— Ya se ha marchado.（マルタはどうなりましたか？ — もう立ち去りました）〔原、1979,pp. 124−125 より。以下とくに断らないかぎり、例文はすべて原、1979から引用することにする〕

この用法は英語の現在完了形でもしごく一般的なものであり、とりたてて述べることもない。

b) ある時間的単位内に起こったことをその時間的単位がまだ終わらないうちに述べるときに用いられる。

例：¿A qué hora has desayunado esta mañana? — He desayunado muy temprano, a las seis.（けさ君は何時に朝食を食べたの？ — ぼくはとても早く、6時に朝食を食べたよ）

Este mes hemos trabajado muy poco.（今月われわれはほんの少ししか働かなかった）

Este año Carlos ha estudiado más que nunca.（今年カルロスは例年になく勉強した）

上にあげた現在完了形の用法は、異論を唱える人がなくはないが、英文法では比較的珍しい部類に属すようである。これらの場合英語はたいてい過去形を用いるらしい。

c) ずっと以前に完了した動作でも、それを現在の自分に心理的に深く関係づけて表現したいときに用いられる。

例：Cristóbal Colón ha llegado a las Indias el primero.（クリストバル・コロン〔＝クリストファー・コロンブス〕は最初にインド〔＝西インド諸島〕に到着した）

筆者が学生とスペイン語で書かれた歴史書を読んでいると、学生にはこの用法が大変珍しいと見えてよく質問を受ける。すなわち「コロンブスが西インド諸島に到着したのはいまから500年も以前のことなのだから、それを現在完了形で表わすのはおかしい。むしろこの場合には過去形を用いるべきではないか」と。たしかに理くつはそのとおりであるが、スペイン語ではこのような場合に現在完了形を用いてけっしてまちがいではないのである。ただし歴史書の場合、過去の歴史的事実を述べる関係上、必然的に完了過去形（あるいは不完了過去形も）を用いることが多くなる。ところがスペイン語には同一の形をおたがいに非常に近接した位置で二度以上用いることを極端にきらう傾向があり、こうした文体論的配慮から現在完了形を用いることがあることも考慮のうちに入れておくべきであろう。

1.1.1.2. 経　　験

例：Desde España no he escrito nunca a mis padres.（スペインから私は私の両親に一度も手紙を書いたことがない）

この用法については筆者はとくに述べるべき事柄を持たない。しかし本稿の冒頭で述べたシンポジウ

ムで、池上岑夫氏が「ポルトガル語では「経験」を表わすのに、複合過去形を用いず、筆者の用語で言うところの完了過去形ですます」とおっしゃったとき、筆者は少なからずびっくりしたことをつけ加えておこう。

1.1.1.3. 継　　続

この「継続」の用法にはいささか問題がある。まず用例を見てみよう。

例：Hasta ahora he descubierto muchas faltas de mi coche.（いままでに私は私の車について多くの欠陥を発見してきた）

Hace tres meses que aprendemos español.

Aprendemos español desde hace tres meses.（われわれは3カ月前からスペイン語を学んでいる）

上の2例文からわかるとおり、継続期間につき具体的表示があると、

「hace＋継続期間＋que＋定動詞（単一の形の）」または

「定動詞（単一の形の）＋desde hace＋継続期間」

というふうに、現在完了形のような複合形を用いずにすんでしまうので、現在完了形を用いての「継続」の用法はごくまれにしか現われないことになる。

1.1.1.4. 「tener＋過去分詞＋直接補語（代）名詞」について

例：José María tiene sacadas dos entradas para nosotros.（ホセ・マリーヤはわれわれのために入場券を2枚買ってくれてある）

José María ha sacado dos entradas para nosotros.（ホセ・マリーヤはわれわれのために入場券を2枚買ってくれた）

上記2文の日本語訳からわかるように、「tener＋過去分詞＋直接補語（代）名詞）の方は動作完了後の状態にまで言及する点が、単なる現在完了形の表わす意味と異なっている。なお過去分詞と直接補語（代）名詞とのあいだには「述語 ― 主語」の関係があり、したがって過去分詞は直接補語（代）名詞の性・数に一致する。

1.1.1.5. 「ser＋自動詞の過去分詞」について

この形は中世スペイン語では「完了」の意味で用いられ、「受身」の意味は帯びてはいなかった。

例：El día es exido, la noch querie entrar.（Poema de Mio Cid, v.311）（昼が終わり、夜になろうとしていた）

この文の es exido は「去った」という「完了」の意味で用いられている。

¡Et que agora seamos venidos a tan gran estremo de ceguedad!（A. de Valdés, Diálogo de las cosas ocurridas en Roma, 1ª parte）（かくしていまやわれわれは盲目のかくも大なるきわみにまで達してしまったとは！）

このseamos venidosもいまならhayamos venidoと言うべきところである。

1.1.2. 完了過去形

この形も一般には「不定過去」とか「過去」とか「単純過去」とか「点過去」とか呼ばれているようだが、筆者は、1.1.3.で出てくる「不完了過去形」と「不」の有無によって対立させられる点を重視してあえて「完了過去形」と呼ぶことにしている。なお宮城昇・エンリーケ・コントレーラス監修：和西辞典、白水社、東京、1979は、スペイン・ロイヤル・アカデミーがその1973年版文法（通称「エ

スボーソ」)において「単純完了過去」という名称をこの形にあてていることに基づいて、この形を「完了過去」と呼んでいるようだが、筆者の場合とは根拠が異なることを付記しておきたい。

その活用形は、hablar(話す)に例をとると、以下のごとくである。

hablar

hablé	hablamos
hablaste	hablasteis
habló	hablaron

しかしこの時制の活用形には不規則活用が多く、スペイン語初学者泣かせである。とくにそのⅢ人称複数形から接続法過去形および、現在ほとんどまったく用いられないからいいようなものであるが、接続法未来形が導かれる、つまり直説法完了過去形が不規則なら、接続法過去形および接続法未来形も不規則になるのであるから、まさに泣き面に蜂という感じである。

その用法は、過去に起こった動作を、継続的にではなく、瞬間的に捉えると一言で表現できる。したがって日本語訳は「〜した」となる。直説法現在完了形との違いは、完了過去形が完全に過去のでき事としてドライに突き放した感じがするのに対し、現在完了形の方はたとえどんなに昔のことを述べようとも、つねに話し手の現在の心理と深く結びついているという点にある。なお、過去に起こった動作を継続的に捉えたい(日本語訳は「〜していた」)のであれば、1.1.3.で出てくる直説法不完了過去形を用いることになる。

例:¿Cuánto tiempo hace que compraste el piano? — Hace tres meses que lo compré.(君はどれくらい以前にそのピヤノを買ったの? — 3カ月前にそれを買ったよ)

1.1.3. 不完了過去形

この時制についても、フランス語文法にならって、「半過去」であるとか、1.1.2.で出た「点過去」と対立させての「線過去」であるとかの別名がある。

その活用形は、例によって hablar に例をとると、

hablar

hablaba	hablábamos
hablabas	hablabais
hablaba	hablaban

となる。その用法は四つに分けられる。

a) 完了過去が過去の動作を瞬間的に捉え、「〜した」とドライに突き放すのに対し、不完了過去は過去の動作を継続的に捉え、「〜していた」と、現在完了ほどではないにしても暖か味をこめて表現する。したがって英語の過去進行形 was・were + -ing の用法と似てくる。この意味でスペイン語は進行形を使う必要性が小であると言うことができる。

例:¿Hablabas francés hace tres años? — Sí, lo hablaba tan bien como ahora.(君は3年前フランス語を話していたかい? — うん、いまと同じくらいじょうずにそれを話していたよ)

b) 過去の動作を継続的に表現するために、「過去においてよく〜したものだった」という過去の習慣を表わすのに用いられる。

例：Entonces escribía a mi novia dos veces a la semana y ahora le escribo solamente una vez.（そのころ私は私の恋人〔女性〕に週に2回手紙を書いたものだったが、いまはたった1回だ）

c）接続詞 que に導かれた従属節中の従動詞が直説法現在で、その従動詞を従えている主動詞も直説法現在であるような文において、主動詞が過去時制をとった場合に、従動詞の時制は、原則として不完了過去である。前掲「エスボーソ」はその pp. 518−519 において、従動詞は完了過去をとりうるとしているが、筆者はこれには賛意を表しがたい。

例：Pedro me dice que está en casa mañana.（ペドロは明日在宅していると私に言っている）

Pedro me dijo que estaba en casa al día siguiente.（ペドロは翌日在宅していると私に言った）

d）非常にまれではあるが、「婉曲」な感じを出すのに用いられることがある。

例：¿Qué quería? — Quiero una caña y media ración de calamares fritos.（〔入ってきた客にむかってバーのボーイが〕何をさしあげましょうか？ — ビールをグラス1杯とイカのフライを半人前ください）

以上直説法現在完了形と、それに関係の深い完了過去形と不完了過去形とを順に紹介してきたが、とくにスペイン語初学者は西作文の際にこれら3時制の使い分けに困るらしい。慣れてしまえばどうということはないのだが、初学者がこれら3時制に初対面の際に、それらの用法の峻別がぴたりと会得できるような説明の仕方はないものかと常日頃筆者は頭を悩ましている。

1. 1. 4. 過去完了形

この形は直接には現在完了形と関係がないかもしれないが、いちおう簡単に紹介しておく。「過去完了」よりも「大過去」と呼ばれることの方が多いかもしれない。その活用形は、

hablar

había hablado	habíamos hablado
habías hablado	habíais hablado
había hablado	habían hablado

というふうに、完了の助動詞haber の不完了過去形を用いるのであって、同完了過去形を用いるのではない。haber の完了過去形に過去分詞を加えてつくる複合形は「直説法直前過去形」と呼ばれ、これについては 1. 1. 5. で説明する。

過去完了形の用法は二つある。

a）主として接続詞 queに導かれる従属節において、主動詞が直説法現在、従動詞が直説法現在完了という文章の場合には、もし主動詞が過去時制をとったとすると、従動詞は「時の一致」の法則により過去完了形をとるのが原則となっている。

例：Pedro me dice que ha estado en casa en la mañana.（ペドロは午前中在宅したと私に言っている）

Pedro me dijo que había estado en casa en la mañana.（ペドロは午前中在宅したと私に言った）

b) A，B二つの過去の動作につき、Aの方がBよりも以前に起こった場合、両動作間の時間的ズレを強調したいとき、過去完了形をAの動作に適用する。Bの方はふつう完了過去形で表わされる。

例：Cuando ocurrió el terremoto, todos habíamos comido en casa.

（地震が起こったとき、われわれはみんな家で食事をすませたあとだった）

1.1.5. 直前過去形

hablar

hube hablado	hubimos hablado
hubiste hablado	hubisteis hablado
hubo hablado	hubieron hablado

この形はかつて、あるきまった過去時の直前に完了した行為を表わしていた。そしてつぎのような「時」の副詞節の中でのみ用いられていた。

después (de) que … …したあとで

apenas, así que, en cuanto, luego que, no bien, tan pronto como …. … するやいなや

このようにほんのわずかな「時」の副詞節の中でしか用いられなかったがために、現今ではほとんどまったく用いられず、完了過去形によって代用されるのがつねである。

直説法にはこのほか未来完了形と過去未来完了形の二つの完了形があるが、本稿の主題からは大きくはずれるので、あえて割愛することにする。

1.2. 接 続 法

直説法には、現在使われないところの直前過去形まで含めれば、合計五つの完了形があることになったが、接続法では、現在使われないところの接続法未来形を含めても、わずか三つの完了形しかない。つまり直説法より完了形が二つ少ないことになるが、その理由は、接続法には過去完了形と直前過去形の区別がないこと、また直説法の過去未来完了形に相当する接続法の形がないことの二つである。

1.2.1. 接続法現在完了形

hablar

haya hablado	hayamos hablado
hayas hablado	hayáis hablado
haya hablado	hayan hablado

a) もともと接続法現在形をとっていた従動詞に完了の意味を帯びることが要求された場合。

b) もともと直説法現在完了形または未来完了形をとっていた従動詞が、主動詞の、または従動詞を導く接続詞の意味に従って接続法をとった場合。

1.2.2. 接続法過去完了形

hablar

RA型	hubiera hablado	hubiéramos hablado
	hubieras hablado	hubierais hablado
	hubiera hablado	hubieran hablado
SE型	hubiese hablado	hubiésemos hablado

hubieses hablado　hubieseis hablado

hubiese hablado　hubiesen hablado

この複合時制に関するかぎり、ＲＡ型とＳＥ型との用法上のちがいは、過去の事実の反対を仮想する条件文の帰結節において、ＲＡ型は用いられるが、ＳＥ型は用いられない（まれに例外はあり、たとえば Juan Valera の El Pescadorcito Urashima の中ではこのような場合にＳＥ型が用いられている）ことだけである。そもそもほとんどまったく用法が同じの二つの動詞の活用形が共存していること自体、言語学的経済性の観点からすれば、まったく不合理なことであり、その証拠に中南米のスペイン語ではＳＥ型はほとんどまったく用いられず、ＲＡ型ばかりが用いられている。その意味で、スペインのスペイン語はＲＡ型とＳＥ型とを両方とも用いているから不合理であると言えよう。

用法

a) 時の一致。主動詞が直接法現在形で、従動詞が接続法現在完了形であるような文で、主動詞が過去時制をとった場合に従動詞はそれにつられて接続法過去完了ＲＡ型またはＳＥ型となる。

b) 過去の事実の反対を仮想する条件文の条件節に現われる。もちろんＲＡ型でもＳＥ型でもよい。またその帰結節には接続法過去完了ＲＡ型が現われるのがふつうだが、直接法過去未来完了形が現われてもよいことになっている。なお前述エスボーソのpp.474−475では帰結節には接続法過去完了ＳＥ型も可であると大変大胆なことが書かれている。

1.2.3.　接続法未来完了形

hablar

hubiere hablado　hubiéremos hablado

hubieres hablado　hubiereis hablado

hubiere hablado　hubieren hablado

用法

未来において完了しているであろうと想定される行為について、とくに条件節において、用いられる。

現今では、非常に古めかしい法律文以外はめったに用いられず、直説法現在完了形に代用されるのがふつうである。

以上現代スペイン語の、主として複合時制を逐一検討してきたが、ここまでで筆者が強く感じることは、単純時制と複合時制との対応は完全に１：１にはなっていないけれども、両時制および両者間の対応にはおどろくべき整然性・対応性があるということである。しかも 2.でこれから検討するように、ラテン語では一つとしてこれら複合時制は存在していなかったのである。これはいったい何を物語るのだろうか？　筆者の考えでは、ラテン語からスペイン語への移行の際に、おどろくべき分析的傾向が支配したことを物語っているように思える。委細は以下の 2.で見ることにしよう。

2.　通時的観点から見た完了形の問題点

2.1.　ラテン語の直説法の完了形

わが国ではどうやらラテン文法の用語も統一されているとは言えない状態にあるらしい。そこで筆者にはもっとも身近である田中秀央：羅和辞典、東京、研究社、1956の「付録Ⅱ：転尾および活用表」の中で用いられている用語に従うことにした。

2.1.1. 完了過去

AMĀVĪ	AMĀVIMUS
AMĀVISTĪ	AMĀVISTIS
AMĀVIT	AMĀVERUNT

この形は直接にはスペイン語の直説法完了過去形 amé, amaste, amó ; amamos, amasteis, amaron を生んだのであるが、田中、1956の完了過去の活用表の上には、このラテン語の完了過去が英語のいかなる動詞形に相当するかが書かれている。それによると、ラテン語のこの形は、英語の I have loved, loved, did love, etc.に相当すると書かれているから、このことから判断すると、どうやら、この形はスペイン語の現在完了形と完了過去形の表わす意味を兼ねていたらしいことがわかる。すなわち、ごく最近起こったばかりの動作も表わせれば、ずっと以前に起こった動作をも表わせるということである。したがってスペイン語でこの形が完了過去形になったということは、ラテン語からスペイン語への移行の過程において、現今の現在完了形が表わす意味を表わす形が欠けていた — たとえ一時的にせよ — と考えられるのである。

2.1.2. 全分過去

AMĀVERAM	AMĀVERĀMUS
AMĀVERAS	AMĀVERĀTIS
AMĀVERAT	AMĀVERANT

田中、1956では「全分過去」という聞き慣れない名称が用いられているが、これはわれわれの言う「過去完了形」のことである。これでわかるとおり、スペイン語では、この形は分析的な過去完了形 había amado, habías amado, …… (1.1.4.参照)によってとって代わられた。そしてそれ自身はなんと接続法過去のRA型になってしまったのである。2000年という長年月のあいだにはわれわれの想像もできないような言語変化が起こるもので、ただただ感嘆のほかはない。ちなみに動詞amar(愛する)の接続法過去RA型は、amara, amaras, amara ; amáramos, amarais, amaranである。ラテン語の該当形から例外なく－VE－の部分が脱落している点にとくに注意されたい。

2.1.3. 未来完了

AMĀVERŌ	AMĀVERIMUS
AMĀVERIS	AMĀVERITIS
AMĀVERIT	AMĀVERINT

この形は現在のスペイン語ではhabré amado, habrás amado, habrá amado ; habremos amado, habréis amado, habrán amado という分析的形によってとって代わられてしまい、それ自体はスペイン語の接続法未来形(現在ほとんどまったく用いられない。1.2.3.を参照のこと)成立の母体となった。

2.2. 接続法

2.2.1. 接続法不完了過去

AMĀREM	AMĀRĒMUS
AMĀRĒS	AMĀRĒTIS
AMĀRET	AMĀRENT

この形は現在のスペイン語では接続法未来形 amare, amares, amare ; amáremos, amareis, amarenとして残っているが、この形成立の母体となったのはあくまでもラテン語の直説法未来完了であるとされていて、この形はただ単にその成立に貢献しただけであるというのが定説となっている。

2.2.2. 完了過去

AMĀVERIM	AMĀVERIMUS
AMĀVERIS	AMĀVERITIS
AMĀVERIT	AMĀVERINT

この形もまた現在のスペイン語では接続法未来形として残っているが、やはりラテン語の接続法不完了過去と同様に、接続法未来形成立のためにサイドから貢献したとされている。したがって以上をまとめてみると、スペイン語の接続法未来形成立の母体はあくまでもラテン語の直説法未来完了であって、これの成立を助けた形として、不幸にもお互い形の似通っていた、またラテン語の直説法未来完了とも形の似通っていたラテン語の接続法不完了過去と接続法完了過去の二つがあったということになる。しかしこれら三つの形による合作としてのスペイン語の接続法未来形でありながら、現在ほとんどまったく用いられないで、直説法現在形または接続法現在形で用が足りてしまうという事実は、スペイン語文法史を知る者にとっては、いささかさみしい事態ではなかろうか。

ところで筆者は原、1979のp.237において、「接続法にはなぜ直説法のような完了過去と不完了過去の区別がないか」という問を発しておいたが、その答は、「両時制ともその活用形が他の時制(=ラテン語の直説法未来完了)のそれに酷似していたこともその原因だが、とりわけ接続法でまで「〜した」と「〜していた」の別を守る必要はないとスペイン人が考えたのが大きな原因であろう」というのであった。しかし以上のように考察してくると、むしろ活用形の上での酷似が第1の原因であるように思われてくる。なお第3種活用では接続法不完了過去と同完了過去とのあいだに活用形の上での少なからぬ差違が認められるが、その他の第1、2、4種活用では両活用形は酷似していると言えるから、大勢はいかんともしがたい。

2.2.3. 全分過去

AMĀVISSEM	AMĀVISSĒMUS
AMĀVISSĒS	AMĀVISSĒTIS
AMĀVISSET	AMĀVISSENT

この形がスペイン語では、これまたおどろいたことに、接続法過去SE型 amase, amases, amase ; amásemos, amaseis, amasenに変わった。いずれの形からも−VI−が脱落していることに注意。そしてスペイン語の接続法過去完了形としては、1.2.2.で紹介した分析的な活用形が用いられることになった。

3. 現在完了形成立についての二説

以上の考察から、ラテン語においては、現今の現在完了形が表わす意味だけをもっぱら表わす活用形はなかったことがわかる。つまり現今の完了過去形の意味と現在完了形のそれとをあわせ表わす単一の活用形しかなかったということである。

そこでLapesa, R.: Historia de la Lengua Española[8], Madrid, Gredos, 1980のp.77を見ると、

"動詞HABERE＋他の動詞の過去分詞の形は、もうおこなわれはしたものの、そのまま保たれたり、その結果がそのまま保たれているような行為を表わすのに用いられていた。たとえばスペイン語のtener(tengo estudiado el asunto［私はその件を検討してある］)のように、もっとあとになると、完了の意味を帯び、DIXI, FECERAMのほかに、HABEO DICTUM, HABABAM FACTUM という形が現われた。"

と書かれている。この文言から察するに、どうやらラテン語の直説法完了過去はだんだんとスペイン語の直説法完了過去形的な意味しか表わさなくなったようで、スペイン語の直説法現在完了形的な意味は別の形によって表わそうという傾向が生じたようである。この別の形が haber と過去分詞を用いた分析的な形であったのだ。

では以上の前提に立って、直説法現在完了形成立についての二説を検討してみよう。

3.1. 最近完了したばかりの過去の動作を表わす必要に迫られ、それがロマンス諸語の分析的表現への傾向に乗った。

これは3.で引用したLapesaの言と照らし合わせてみると、もしLapesaの言が真であると仮定するならば、この想定も真であることになる。

3.2. まず最初にロマンス諸語の分析的表現への傾向に乗って、ラテン語の直説法過去完了形がhabía amado, habías amado,…… と迂言的表現に変わり、ついで同未来完了形もhabré amado, habrás amado,……となり、現在完了形のところがあきまであるのもおかしいということで、he amado, has amado,…… が成立した。

これまた前掲 Lapesa の言が正しいとするならば、彼によると、まだラテン語の直説法完了過去が現今のスペイン語の直説法完了過去形の表わす意味のみならず、同現在完了形の表わす意味をも表わしえた時期に平行して、すでに分析的表現が、その表わす意味はどうであれ、存在していたようにとれるので、その意味ではこの第二の説は誤りということになる。

4. 結　　び

本稿で筆者は頻繁に「分析的傾向または分析的表現」とか「迂言的表現」とかの表現を用いてきた。これはもちろんたとえばAMĀVERAMのような単一の形を、había amado のように二つあるいはそれ以上の形の組み合わせによってとって代え、記憶の負担を軽減する、非常に合理的な傾向であり、スペイン語ではこの完了形の成立のほかにも、PIE I＋B＋Ō＞Lat. IBŌ＞ĪRE HABEŌ＞Cast. iré＞Am. Sp. voy a ir のような未来形についての迂言的表現もある。さらに格を廃止して、「前置詞＋(代)名詞」にとって代えたのももちろん分析的傾向である。

さらに視野を広げてこれをロマンス語全体という観点から見ても、同じように分析的傾向が支配的であると言うことができよう。まさにそれゆえにこそ、とくにメキシコで支配的であるところの、この分析的傾向と正反対の傾向の解釈に筆者は非常に悩まされている。たとえば本稿の1.1.1.1.のb) で筆者は、

¿A qué hora has desayunado esta mañana? — He desayunado muy temprano, a las seis.

という例文を掲げたが、これがメキシコでは、

¿ A qué hora desayunaste esta mañana? — Desayuné muy temprano, a las seis.

となるのである。つまりマドリードのスペイン語では当然現在完了形が用いられるはずなのに、完了過去形が用いられるのである。筆者は1968年夏のメキシコ・シティー到着のその日からこの表現にこの上なくびっくりさせられたことを苦々しく思い出す。1980年夏 Eugenio Coseriu が来日した際に、この現象の解釈について彼に質問してみたが、筆者にとって納得のいく答は返ってこなかった。この件についてどなたかよい智恵を貸してくださるかたはないものだろうか？

本稿を了えるにあたって、本稿を口頭発表した際に聴衆にお配りした筆者のハンドアウトの中に不備があった。それを本稿中で指摘するならば、2.1.1.の部分である。この部分の不備を筆者に指摘して筆者の蒙をひらいてくださったのは東京大学文学部イタリア文学科の長神　悟氏であった。記して謝意を表するしだいである。